大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」情報紙　第41号

INFORMATION エセナおおた

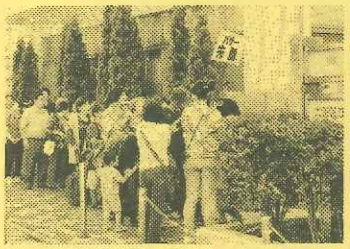
特集：災害時における男女共同参画センターの役割調査報告書より　平成２４年１０月１５日発行

区内ルポ② 「エセナフェスタ2012」開催 過去最高の入場者!!

エセナフェスタは、2000年（平成12年）大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」としてリニューアルされたのを機に、毎年、センターのご利用者、団体と共に実施している年に一度のお祭りです。このエセナフェスタは第6期大田区男女共同参画推進プランの重点的な取り組みに位置付けられ、「区民の自主的な活動の場の提供」、「区民相互の交流の場の提供」、「他団体との連携を図りながらのネットワーク構築の場」、「エセナおおたの認知度を上げる」など、たくさんの目的をもった大きな事業です。

今年は9月30日（日）に実施され、42団体が参加、展示、販売、発表に分かれて46のコーナーが設けられました。参加団体には事前に2回の打合せ会に出席していただき準備万端！　しかし、前日は台風19号が来るか来るか（？）という中準備を始め、気が気ではありませんでしたが当日は穏やかなうちに大田区経営管理部男女平等推進課田中教彦課長と牟田静香センター長がくす玉を割り、開会することができました。

例年1,500名ほどの来場があり、今年も区長を始めとし、議員のみなさま、行政関係、関係団体のみなさまなど、過去最高の1,591名のお客さまで大変にぎわいました。



バザー売上を東北三県の女性センターへ

「バザー」は毎年エセナフェスタの1か月ほど前からご利用者の皆様にお声かけし、家庭にある新品の不用品や未開封、賞味期限内の食料品などを寄付していただき、売上をそのまま女性支援団体に寄付しています。今年もバザーは人気コーナーで、開会前から多くのみなさんに並んでお待ち願い、またたく間に大方の物が売れてしまいました。

エセナフェスタ終了後、物品を提供してくださった方、買ってくださった方の応援の気持ちを、岩手県、宮城県、福島県の被災三県の女性センターに届くように、全国の男女共同参画センターや女性センターを束ねているNPO法人全国女性会館協議会による「東日本大震災女性センターネットワーク募金」に託しました。

被災地ではまだまだ支援を必要としている方々がたくさんいることを聞きます。これからもエセナおおたでできることを応援していきたいと思います。　（青木千恵）

＜バザー会場＞
あっという間に売り切れました。
ありがとうございました。

防災（災害復興を含む）における男女共同参画の視点の重要性については、国全体の防災マスタープランである「防災基本計画」に盛り込まれ、さらに「第3次男女共同参画基本計画」においては、新たに「地域、防災・環境、その他の分野における男女共同参画の推進」として重点分野のひとつに位置づけられています。しかし、東日本大震災に際しては、被災者支援、避難所運営、生活再建等復興支援などの各段階で、男女共同参画の視点からの対応が十分とはいえない状況が見えました。

そのような中で、被災地の男女共同参画センターおよび女性センターの中には男女共同参画の視点を発揮し、地域の被災者支援の拠点施設として支援活動を実践してきたところも多く、またそうした活動に触発され全国各地の男女共同参画センターの支援活動や防災関連事業が大変活発に行なわれました。しかし、これまで上記のような男女共同参画センターの支援活動の事例は十分に報告された事はありませんでした。今回の東日本大震災に際して、ようやく災害対応・防災における男女共同参画センターの活動実態やその役割が明らかになりつつあります。

このため東日本大震災に際して被災地の男女共同参画センターおよび全国各地の主な男女共同参画センターがどのような被災者支援や災害・復興対応を行なったかを明らかにし、**男女共同参画センターの災害時における「役割と課題」を検証することを目的**として、男女共同参画センターによる被災者支援等災害対応の活動について調査が実施されました。

被災地の男女共同参画センターの調査より

●発災時の状況
（以下の事態がダブって発生した施設もある）
①停電
②建物および内部の破損被害
③通信系統の不通（電話・インターネット）
④断水

多くの施設で停電となったが、日常的に避難訓練を行なっていた施設は比較的スムーズに利用者の避難ができた。しかし停電に伴い、エレベーターが停止したためビルなどの上層階に入っていた施設等は非常階段からの誘導に手間取った。なかでも高齢の利用者が歩行困難となり、施設の担架で避難という事態もあった。

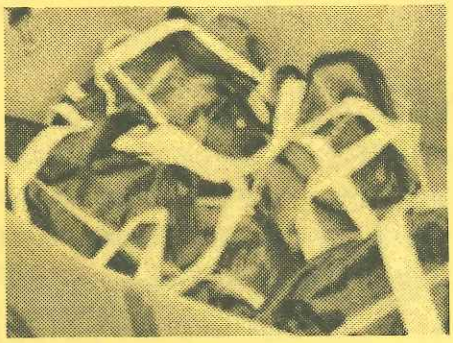
建物の破損は比較的少なかったが、内部の図書の散乱とガラスの破損が目立っている。電話・インターネット等通信系統が不通となり、一時外部からの情報が入らないという事態が発生したこともあり、情報収集のためのラジオの必要性を訴えている施設もあった。

それぞれの施設で発災時の状況の違いはあるが、職員等の賢明な判断により（マニュアルがあるところでも想定外の事態が起きたため、職員等による日頃の避難訓練が非常時において、現状に適応した行動を選択することに役立った）安全に利用者を避難誘導できたという結果は、何より学ぶところが大きかった。

災害時における男女共同参画

＜調査＞2011年7～8月：被災地の男女共同参画センター11施設、ビックパレット福島、被災地以外2か所の計14か所にインタビュー

●実施した活動
（各施設の主だった事項を取りあげた）
①相談窓口の開設（電話での相談を含む）：7施設
②伝言板・情報掲示板等の設置：3施設
③女性専用スペースの設置：2施設
④支援活動：各施設にて、デリバリーケア、思春期の女児への心とからだのケア、MDGガールズプロジェクト、せんたくネット、社会貢献活動プログラムボランティア、コンサート・演劇、求人広告チラシ設置等々。



◀エルソーラ仙台を中心に行なわれた「せんたくネット」事業。ボランティアに渡す前の洗濯物バッグ

被災地の各施設は阪神・淡路大震災に学び、いち早く相談窓口を開設した。早い施設では発災後3日で開始。中には法律・DVに特化した施設もあった。

3月中は相談の内容が「物資はどうしたら手に入るか」等の支援物資の供給に関しての事柄が多くみられた。相談員の配置がひとつのセンター単独では人員等のことで存続が難しい場合や、相談の内容により子ども家庭支援センター等の地域諸団体との連携で相談体制を強化した。

また、相談窓口の告知として従来通りのホームページや各種パンフレットへの記載も見られたが、メディア（新聞・公共放送・地元TV・ラジオ）を使って繰り返しての告知が力を発揮した。何より被災者の特に女性や子ども・高齢者にとって安心感につながり、人員の確保に苦慮しながらも続けられた相談窓口は「継続が力」となった事例であった。

伝言板・情報掲示板（物資の募集・配給や新聞のクリッピング記事）等の設置は、心のケアとして、また情報の提供共有の場としても、センターと利用者とのコミュニケーションを円滑にし、その中で男女共同参画の視点も広げられた。

女性専用スペースの設置のなかには、多くの視線のなかで相談者が利用しづらいのではとの配慮から、あえて「相談」という言葉を掲げず、避難している女性が安全で（防犯対策・相談窓口のチラシ設置、防犯ブザーの提供等）安心して過ごせる場（女性下着の支給の場を提供・茶菓の提供等）を提供するというコンセプトで、たくさんの女性たちに安心と心のケアを届けた施設もあった。

建物や内部の破損により一般の方に利用いただけない施設は（やむなく休館となったところは除き）安全を確保のうえ支援物資の保管・輸送の拠点としての役割を果たした。

センターの役割調査報告書より

<報告>2012年3月：内閣府男女共同参画局、特定非営利活動法人全国女性会館協議会、公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会による

●今後の活動（各施設の意見を抜粋）

・震災・復興における男女共同参画の視点を広く伝える啓発事業と、防災マニュアル作りに取り組む。
・震災後にこそ男女共同参画意識が大切。女性の視点で避難所運営を成功させた。復興の過程では固定的性別役割分業が改めてあらわになっている現状をふまえて、男女共同参画の意識を社会に浸透させていきたい。
・「災害・復興～女性の参画と視点を重視したネットワークづくり」シンポジウムの開催。
・非常事態に陥ったときこそ日頃からのつながりが問われる。行政、NPO、ボランティア団体などの民間組織との関係の作りかた、実効性のあるネットワークを築く方法、自助・公助・共助のゆるやかなつながりの在り方などが今後のテーマとなる。
・女性と子どものための放射線と健康セミナーを予定。
・必要事業は子どもたちや市民生活の安全の確保と心のケア、放射能による人権問題。
・避難者と地域の交流を作り出す。
・被災女性の経済的自立を支援することで実現した現地採用のデリバリーケアプロジェクト事業で、相談ニーズも聞き、ホットラインにつないでいく作業の実施。
・災害・復興に女性が参画するための人材育成。
・子どもと父親の講座（震災による失業等で父親と子どもが接する機会が増えている）、センターは心のケア講座を企画するだけが仕事ではない。さまざまな場面で市民とかかわり課題解決に向けて関連部署と連携再生に向けて市民が歩みを進めていけるよう支援する。
・支援したいができないと悩む女性が、支援側に立つことでエンパワーされると考え、館の「ここで」を重視し、何か特別なこと、大きなことではなくとも、一人ひとりの気持ちの回復に寄り添っていくイメージで、事業をていねいに継続していく。

▲福島県郡山市ビックパレット内「おだがいさまセンター」の情報掲示板

未曾有の大震災発生直後の生々しい現場から、各センターの職員等が力を合わせて行なった支援は女性の視点を生かして、被災者の方々の息づかいまでも汲み取るような細かく配慮の行き届いた多岐にわたるものでした。そしてそこから見えてきた新たな課題と今現在も向き合いながら活動を続行中です。

被災地以外の男女共同参画センターの調査より

●埼玉県男女共同参画センター

①発災時の状況

・建物の破損等はなかった。さいたまスーパーアリーナが県外被災者2500名収容の大規模避難所を設置したことに伴い、センターの情報ライブラリーから雑誌・絵本を届ける等の活動を開始。

②実施した活動

・シャワー室の提供や相談窓口を開設。
乳幼児の沐浴から始まり、障がいを持つ人等々に広げ、最終的にはどなたでもと受け入れ、1日160名を超える利用者になった。施設の一部を提供して子どもたちへの読み聞かせ、マッサージ、支援物資の中の女性・子ども用下着の提供場所となり、集団避難した福島県双葉町職員にも資料・機材を提供、必死に働く職員の支援も行なった。

▲提供された物資を選ぶ被災者

③今後の活動

・被災者支援を行なっていく中で地域の諸団体との日ごろからの連携や情報交換が大事だと実感した。県の地域防災計画見直しに、女性および男女共同参画の課題について意見を伝える立場で参加。これまで明確には書かれていなかった避難所における女性への配慮や、避難所運営における男女共同参画の必要性につての文言が追加される予定。災害時に男女共同参画推進の総合拠点施設である男女共同参画センターが、どの様な役割を担うかを明確に記述しておくことが重要である。

●兵庫県立男女共同参画センター

①発災時の状況

・直接的な被害はなし。発災直後周辺府県で構成される関西広域連合の取り決めにより、宮城県へ職員を派遣。

②実施した活動

・阪神・淡路大震災当時の自分たちの取り組みが被災地の役に立つと考え、16年前の資料から抜粋したものを（毎日新聞掲載「心の悩み　相談室」）をコピーし、マスコミ・県施設・女性関連施設等に送った。

③今後の活動

・東日本大震災に対しては、阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝えるとともに情報提供を行なう。
・今世紀中におこるであろうと予測される南海・東南海地震を視野に入れて、兵庫県版「男女共同参画の視点からの防災・減災マニュアル（仮称）」の作成を計画している。

やはり「自助＋共助＋公助」は復興の基本

被災地での取り組み例を自助とすると、被災地外の取り組みは共助の例になります。ここに公助があって復興全体が進みます。

各施設が伝えてくれた災害・復興において重要な点は、男女共同参画の視点に立った明確で具体的な役割の明文化とそれに伴う非常時を想定した訓練です。

非常事態に陥ったときこそ、日頃からの地域の諸団体とのつながりが問われることを考え、その時に支え合うことのできる専門職集団や地域各種団体との連携を、普段から男女共同参画の催しなどを通して日常的に行なっておくことが大切です。

さらに、未曾有の事態が発生し指示を受けることが難しい状態や、多岐にわたる相談に対する情報収集が困難である等々の状況下にあっては、地域活動を担える女性リーダー、ボランティアの人材の確保と、その育成が大事であることを教えてくれました。

これらを踏まえて男女共同参画センターが復興に向う人々の後押しの支援をする場として、大きな役割を担っていることを再認識しました。

（まとめ：定池由紀子、青木千恵）

もしもの時は「エセナおおた」に！

■避難所において、女性たちが仕切りを作ってほしいと訴えました。しかし「仕切りなんかいらないここは一家なんだ、ちゃんと見えたほうが悪さをしないんだ」という男性リーダーのひとことで、女性たちの要望は聞き入れられなかったという事例が多々ありました。こういう時こそ女性が声をあげ、提案する（例えば更衣室や授乳室などの設置など）ことが大切です。

しかし「日ごろできていないことは非常時にもできない」という言葉がある通り、普段から男女共同参画の意識をもっていなければ、非常時に自分たちの意見を率直に述べ、周囲と調整し、行動できるようにはならないのです。このことからも女性全体をエンパワーメントしていくことが必要です。

■避難所生活も3か月を過ぎると精神的肉体的にストレスが増加します。そこで被災地のセンターでは女性専用スペースを設けました。ここでは団体やグループの協力を得て、料理会や折り紙、手芸教室を開催しました。一例をあげれば、編み物講師の協力で開催した「編み物とおしゃべりの場」で、できあがった作品を販売し、それが被災者の生活支援につながり、ストレスの軽減につながりました。被災者自身ができることを用意したことが支援になりました。

「エセナおおた」でも手芸、合唱、ダンス、書道などたくさんの団体、グループ、個人が活発に活動しています。いざという時にはこのグループとの連携が大変な力になることを教えてくれました。これからもエセナおおたに集う区民グループのみなさんとのゆるやかなネットワークづくりを共に推進していきたいと思います。

■被災地の男女共同参画センターがいち早く手を打ったことは相談窓口の開設でした。DVに関するもの、夜中に波に襲われる夢をみて眠れない、仕事を解雇された、家族間のトラブル等々多岐にわたり、その内容は深刻でした。

「エセナおおた」では職員全員が男女共同参画の意識啓発に携わり、推進をしています。日頃よりご利用者のニーズに細かく対応し、コミュニケーションをとりながら、区民個々人がその持てる能力を活かせる地域づくりを推進しています。

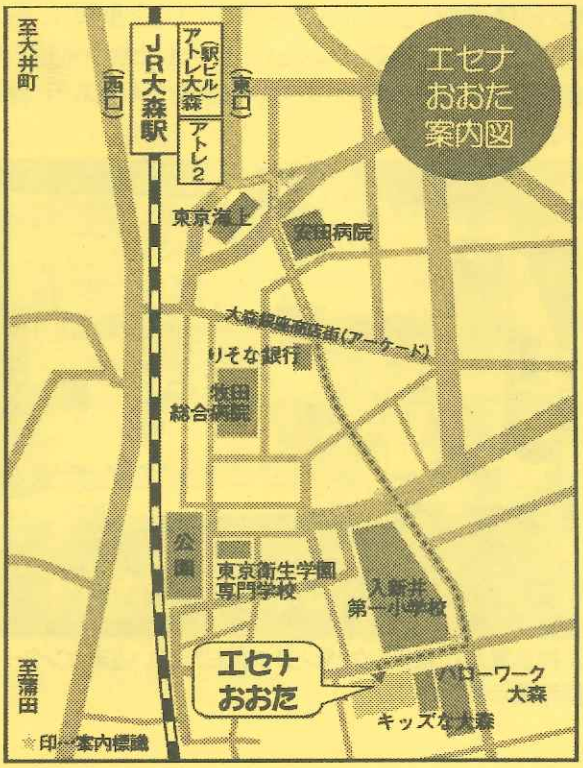
もしもの時も「エセナおおた」は女性たちの声を聞き、その受け皿としてニーズの把握に努めることが大切であることを忘れず、男女共同参画の視点で職員と多くのボランティアと共に地域の皆さんの安心安全のセンターとして、情報の受発信、相談事業等に力を注いでいきます。

カフェ おひさま
エセナおおた1F

甘い香りの
オリジナルコーヒー
150円

からだにやさしい
ハーブティー
150円

トースト各種
150円～

おいしい お茶で おもてなし
営業時間：11：30～17：00
営業日：平日（月～金）

東京都大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
〒143-0016　東京都大田区大森北4-16-4
電話03-3766-6587　03-3766-4586
FAX 03-5764-0604
e-mai：escena@escenaota.jp
HP URL：　http://www.escenaota.jp/
メルマガ：escenaotamail@yahoo.co.jp
指定管理者：NPO法人 男女共同参画おおた